

先日、たまたまNHKの大河ドラマ『豊臣兄弟!』を観ました。舞台は戦国時代、天下統一に突き進む織田信長の美濃攻め。主君の元で出世街道をひた走る木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）が、弟・小一郎らと奔走する回でした。戦国ものということで、放送を楽しみにしている方も多いのではないのでしょうか。かくいう私もその一人です。

歴史に興味を持ったのは、小説がきっかけでした。高校時代のクラスメートから「絶対読んだほうがいい、日本史の授業より勉強になるよ」と薦められたのが、司馬遼太郎の『国盗り物語』でした。一介の油売りから美濃の国主となった斎藤道三と、その娘婿として天下統一の足がかりを掴んだ織田信長の物語。特に、謀略の限りを尽くして成り上がっていく道三のおどろおどろしい描写に引き込まれました。文庫本で全4巻、通学の汽車の中で夢中になって読んだ記憶があります。

それ以降、司馬作品が手放せなくなりました。『関ヶ原』や『功名が辻』などの戦国ものから、『竜馬がゆく』『燃えよ剣』などの幕末もの、そして明治を描いた『坂の上の雲』『世に棲む日日』『翔ぶが如く』など。一つの作品を読み終えるたび、さらに次を読みたいという思いが強まっていった時期でした。

私の日本史の知識は、そのほとんどが司馬遼太郎の著作によるものと言っても過言ではありません。最近では歴史小説をじっくり読む機会が減ってしまいましたが、30数年ぶりに『国盗り物語』を読み返してみようと思います。当時と比べて、今の自分がどんな風に感じるのか、今から楽しみです。